

資料室だより 172

コラールについて

「ドイツ：コラールの詩人達 J.S. バッハに耳傾けつつ」

川中子義勝 教文館

西洋教会音楽の源泉となっているのはグレゴリオ聖歌と共に、コラールというジャンルがある。いうまでもなくグレゴリオ聖歌はカトリックの大いなる遺産である。そして宗教改革後はコラールがプロテスタント教会において同等の価値を持つ音楽的、霊的源泉となるのである。コラールにはグレゴリオ聖歌に基づいてそれをラテン語からドイツ語に書き換えたものもあり、改革以前にドイツ語で流布していた宗教民謡をルターが洗練させたものもあり、また新たに創作されたものもある。霊的な言葉、あるいは神学を簡素な旋律に乗せていくコラールはプロテスタント信徒の信仰を根底的に養うのみならずここからバッハのような複雑なテクスチュアの芸術を生み出すカントウス・フィルムスになっていく。礼拝のなかで記憶された旋律がコラールカンタータのなかに繰り返し鳴り響いて聴く人々を魅了したことであろう。

筆者はドイツ文学を専門とされている方である。「詩人イエスードイツ文学から見た聖書詩学」という興味深い著書があり、私たちにはあまりなじみのない言葉「聖書詩学」の立場から著わされたのが本書である。そしてバッハの音楽に収斂されていくという魅力的な道筋になっている。コラールの解説書は当資料室にもいくつかあるが、歴史のみならず神学、文学の脈絡のなかで筆者個人の感慨、主観も交えているところに、対象に肉迫していく面白味がある。

Bach, Luther-Lieder; 30 Bach-Chorale fur vierstimmigen Chor

Stuttgarter Bach-Ausgaben Urtext Carus

上記の書と共に傍らに置いておきたい楽譜を紹介する。グレゴリオ聖歌とコラールの大きく違うところは旋律に対する同時代からの和声付けがあることである。和声進行によっても言葉は解釈されうる。ルターからバッハまでのドイツプロテスタントの作曲家の和声法をたどることによって作曲家の個人様式とともに時代様式の微妙な変化も分析することができ大変よい勉強の材料である。ここに所収するのは現存するルターの30のコラールとそれに対するバッハの四声体和声で、いわばひとつの完成形となっている。さらにここから教会カンタータ、オルゲルビュッヒラインをはじめとする Choralbearbeitung (コラール編曲集) に展開してドイツバロック音楽のなかに姿を拡大させていく。

楽譜の右上に EG (Evangelisches Gesangbuch) の番号、作詞者、刊行年、BWV 番号が付され学習者に親切な情報を提供している。

杉本ゆり 記